

審査を終え、今回のコンクールの翻訳対象に選ばれた作品、古井由吉著の「辻」と小沼丹著「珈琲挽き」所収の短篇小説五編は、課題作品として非常にふさわしい選択だと感じている。あえて指摘する必要もないくらい、古井由吉と小沼丹の文章はそれぞれまったく違う魅力がありながら、しかし、到るところに読者、翻訳者の想像力を試す「隙」があるという意味では、共通の要素がある。翻訳者が、一つ一つのことばに向かって、丁寧に、心を込めて、その意味や語感、気持ちを汲んでいかなければすぐに解釈が暴走しそうな箇所もたくさん見受けられるし、そうでなくても、どうしても「逐語訳的な」英訳では読者をごまかしきれない、訳文独自のスタイルをきちんと決めてそこに原文を照らしていくしかないような選択を迫られる文章もある。

カトリーナ・アンダーソン氏の英訳はどれも、作品の細部までよく読み込んでおり、納得のいく重層的な解釈を、表現力の豊かな、独創的な英語で表現している。自分なら、こんな訳は思いつかなかっただろう、しかし、いい訳だな、と何度も思いながら、読んだ。とても勉強になる訳文だった。

ジョアンナ・デアー氏とリチャード・ラッツ氏の訳文もまた、どちらもとてもいい文章、英語作品になっているが、デアー氏の作品は、少し原文に背を向けすぎているのではないかという感じを受ける箇所があった。もちろん、原文から離れる、距離をとる、というのは翻訳者の一つの技術である。しかし、横目でも、常に原文に目を向ける姿勢を保った方が、原文も読める読者には納得のいく作品になると感じる。ラッツ氏の訳文は、むしろしっかりと原文に向き合っていたのだが、細かいところで重要な誤解が幾つか見受けられた。そこはやや惜しいと思ったが、この人の訳文にも、いいところがたくさんあった。

マイケル・エメリック